

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：57103

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12514

研究課題名（和文）近代日本の「移民者」像に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Research on the Migrant Image in Modern Japan

研究代表者

大熊 智之（OHKUMA, Tomoyuki）

北九州工業高等専門学校・生産デザイン工学科・准教授

研究者番号：10804544

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：近代日本の移民者は国家や地域によって移動させられた受動的な存在として捉えられがちである。本研究は、近代日本の移民者が移動する存在として自らをどのように認識していたのか検討することで彼らの主体的な側面を捉え直し、移民史・植民地史に貢献することを目指した。そのために、移民者養成の教育に着目し、そこで教えられた「移民者」像と、それを移民（志望）者がどのように受け入れ／反発しながら移動していったのかを検討した。具体的には、以下の二点に取り組んだ。（1）私立の移民学校が養成を目指した「移民者」像と学生による受容。（2）官立の高等商業学校が養成を目指した「移民者」像と学生による受容。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、満州移民国策化前までに期間を限定し、私立の移民学校および官立の高等商業学校が養成を目指した「移民者」像と学生による受容について調査・検討した。このことを通じて、当時いかなる「移民者」像が必要とされ、教育されたのかと、それを学ぶ移民（志望）者たちの教育経験の一端を明らかにすることができた。また、渡米奨励事業を分析する際に、その担い手のアジアを含む対外認識との関係に着目する必要性、移民教育の担い手が民間から国家へと移ることによる「移民者」像の変化について示唆を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：Migrant in modern Japan tend to be perceived as passive beings displaced by nations and regions. This study examined how modern Japanese migrants perceived themselves, and aimed to recapture their subjective aspects.

For this purpose, I focused on the education of migrant training, and examined the image of "migrants" taught there and how migrants accepted and rebelled against it. Specifically, we worked on the following two points. (1) The image of "migrant" that private migrant schools aim to cultivate and acceptance by students. (2) The image of "migrant" that government-run Koto-shogyo-gakko aim to cultivate and acceptance by students.

研究分野：日本近代史

キーワード：「移民者」像 移民教育 日本力行会 高等商業学校

## 1. 研究開始当初の背景

近代における移住現象が現代社会をいかに形成したのかを解明することは、日本近代史上の重要なテーマの一つである。それは日本帝国主義史研究としてはじめられ、80年代に移住史研究が参入することで「人の移動」を重視する新たな視点が加えられた。その後、この帝国主義史と移住史研究による二つの流れを統合し、国家間関係に従属的に区分され別個に研究されてきた「移民」と「植民」を包括的に理解すること、および人々の進出経緯の解明によって移住先社会を理解する重要性が指摘されてきた。それはすなわち、国家に移動させられる客体として描かれてきた近代日本の移住者を、主体的に捉え直すことだと考える。

「移民」と「植民」を共通の枠組みで捉え横断的に分析しようとする動向は2000年代以降ますます盛んになっている。その一方で、進出経緯の解明を通して移住者を主体的に捉え直す作業は進展しているとはいえない。それは従来の出住史研究の多くが、定住を標準としそれに対する特殊性の一例として移住者を把握してきたためではないかと考えられる。そこで本研究は、地縁によらない移住者の進出経緯を解明することで移住者を主体的に捉え直すことを目指し、全国から学生が集まった移住者教育機関を対象として、そこで教えられた「移民者」像と移住者(志望)者による受容を調査することにした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、地縁によらない移住者の進出経緯に着目することで、移住者を主体的に捉え直す視点を提示し、移住者・植民地史の研究を進展させることである。移住者を移動させられる客体から移動する主体へと捉え直すことは、彼らを地域秩序に従属した者から新たな秩序を形成する者へと捉え直すことにもなると考えた。

本研究は地縁によらない移住者の進出経緯を解明するために、分析対象として内地で行われた移住者養成の教育に着目した。従来の研究は移住先ごとに分断される傾向が強かったが、移住者の内地経験に焦点を絞ることで多方面への移動を視野に入れることができる。また、従来、移住者と教育をめぐる研究は、移住先における二世教育、植民地における異民族教育に比べて、移住者養成の教育に関する研究は少ないため実態を解明する必要がある。

## 3. 研究の方法

### (1) 私立の移住者教育機関による「移民者」像

私立の移住者教育機関である日本力行会の移住者養成教育を調査し、そこで提示された「移民者」像を把握する。日本力行会は戦前を代表する移住者奨励団体であり、特にアメリカ移民を多く送出した。力行会創設者の島貫兵太夫がアメリカへの移民送出に尽力した経緯について、彼の朝鮮認識との関連から調査する。日本力行会の活動が拡大される第2代会長・永田稔の時期について、日本力行会関係の雑誌、永田文書をはじめとする日本力行会所蔵資料を用いて、会の事業内容、教育内容とそれを受容する学生たちの認識、および進路を調査する。日本力行会が提示した「移民者」像とそれが学生に与えた影響を解明し、日本力行会海外学校における「移民者」像の特徴を明らかにする。

### (2) 官立の高等商業学校による「移民者」像

官立の拓殖教育機関として高等商業学校を扱う。官立の移住者教育機関としては1933年に設置された拓殖訓練所が目玉されてきたが、高商は比較的早い段階から移住者の人材を供給していた。1929年には文部省によって、長崎・山口・横浜の各高商に、それぞれ南洋向け・中国大陸向け・南米向けの貿易別科を設置し移住者および貿易従事者の養成を実施した。長崎・山口の各高商を中心に、同窓会関係の資料や学校一覧、学校史の成果などを収集する。それらの資料を用いて、教育内容とそれを受容する学生たちの生活と認識、および卒業後の進路を調査し、文部省によって作られた「移民者」像とその受容の実態を考察する。

## 4. 研究成果

### (1) 私立の移住者教育機関による「移民者」像

日本力行会の創設過程と島貫兵太夫の対外認識  
初代会長である島貫兵太夫が力行会の創設に至るまでの過程を理解する上で、彼の対外認識に着目する必要性を確認した。対外認識とは具体的には欧米認識と朝鮮認識、およびその両者の関係である。これらが彼の信仰、救済活動、苦学生支援活動、そして渡米奨励活動とどのように結び付くのかを検討する必要があることを明らかにした。特に彼の朝鮮とのかかわりは従来ほとんど研究されてこなかったが、彼は学生時代に朝鮮で調査を行い、帰国後に盛んに朝鮮伝道論を展開している。その中にはその後の彼の活動の方針にかかわる論点が含まれているだけでなく、欧米宣教師への言及も見られる。こうした点を検討し、島貫の思想的背景と日本力行会創設期の活動への理解を進めることができた。

### 永田稗の移植民奨励論

日本力行会第二代会長である永田稗の移植民奨励論を、日本力行会の機関誌中の論説および永田の著書を中心に調査した。その結果、永田が会長就任後に展開した「海外発展運動」と称する移植民運動の論理を把握することができた。具体的には、島貫と永田の移植民奨励論の比較、永田の北海道開拓経験による影響、および移植民のための教育論に着目して分析した。

### 日本力行会の移植民奨励事業の展開

日本力行会が永田会長の時代に移植民奨励の事業を拡大した過程を調査した。日本力行会内の諸活動の他にも、永田が渡航前教育の重要性を主張し、そのための移植民教育機関の設立を説いて横浜移民講習所の建設に至ったこと、各地方における移植民奨励機関の必要性を説き、日本力行会関係者によるその設立(海外協会等)を後押ししていたことおよびそれらの連関について把握した。

### (2) 官立の高等商業学校による「移民者」像

#### 高等商業学校によって教育された「移民者」像

高等商業学校によって教育された「移民者」像について、山口高等商業学校、長崎高等商業学校のそれぞれについて調査した。学校史資料、地域史資料等を収集し、各校における移植民関係の学科設置の経緯、教育課程、および卒業後の進路等の一端を把握することができた。

#### 高等商業学校における

山口高等商業学校、長崎高等商業学校のそれぞれについて学友会・同窓会資料を中心に収集・分析し、学生生活の実態や学生の認識を通して、学生による教育の受容についてある程度明らかにした。

なお、本研究課題の3年目である2020年度からは新型コロナウイルスの流行によって、十分な資料調査を実施することができず、研究計画は変更を余儀なくされた。しかし、その中でも調査・収集することができた資料を用いて以上の成果をあげることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大熊智之	4. 巻 17
2. 論文標題 キリスト青年たちの移植民運動(4)近代日本における労働会の系譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 キリスト教文化	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大熊智之	4. 巻 14
2. 論文標題 キリスト青年たちの移植民運動(3)近代日本における労働会の系譜	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 キリスト教文化	6. 最初と最後の頁 296-308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大熊智之
2. 発表標題 明治期キリスト者による渡米奨励論と対外認識 島貫兵太夫の朝鮮観と欧米観
3. 学会等名 日本移民学会第4回冬季研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------